

## 私にとって聖霊を信じるとは

### まえおき

この集会で何か話をするようにと張起呂先生の御意向を、田中良子さんを通して伺った時、私はたまたま尹東柱（ユンドンジュー 1917～45・日本統治時代の朝鮮の詩人、解放の年の2月、治安維持法違反の罪で服役中、福岡刑務所で獄死）の詩集（『空と風と詩』影書房、1984）を読んでおりました。その中の「たやすく書かれた詩」（1942）という一篇に次の一節があって、私の心を打ちました。

人生は生きがたいものなのに  
詩がこう  
たやすく書けるのは  
恥づかしいことだ（伊吹郷訳）

いま私はこの詩を読んで、神秘としか言いようのない「聖霊の働き」（この集会の主題）について、私の拙いことばで「たやすく」語ることを、まことに「恥づかしいことだ」と思わざるをえません。

そのことを重々承知しながら、一介の平信徒として「私にとって聖霊の働きを信ずるとは」どのようなことであるかを、少しお話ししてみようと思います。

### 私の原体験

間もなく8月15日がやってきました。皆様の光復節（クワンボクチョル）、私たち日本人にとっては敗戦記念日です。私はその日を日本国内の海軍航空隊で迎えました。私はいわゆる戦争世代のひとりで、2年程の軍隊体験をもっております。

軍隊体験と言っても若い志願兵のそれでありましたし、短時日のものでありましたから、何程のことがわかったわけではありません。

私はその後キリスト教の信仰を与えられ、それに自分のささやかな体験と思索を合わせて、軍隊体験を省察し、これを私の人生のいわば原体験とすることができました。この原体験から私は二つのことを教えられたとっております。一つは、人間の集団の悪ということです。アメリカの神学者ラインホルド・ニーバーという人の著作に『道徳的人間と不道徳社会』という本がありますが、人間は個人的には善い人であっても、集団となると不道徳的になるという強い傾向をもっています。軍隊という異常集団においてそれがいかにはなはだしいかは、あらためて申しあげる必要もないでしょう。私も私なりにそのことを、いやという程体験しました。ですから私はいつも、これからは独りで生きよう、何かをするなら独りでやろう、集団や組織には成可く入らず、関わりをもたずに生きようと思って生きてまいりました。

もう一つは、外面的な規律はそれが一見どんなに立派に見えても、人はそれによって自らを律することはできないということです。外側からの締めつけによって一見いかにも軍規厳正に見えた天皇の軍隊も、一旦敗戦となるやその支柱を失い、烏合の衆と化してしまいました。そのような隊がすべてであったとは申しませんが、少くとも私はこの目でその混乱の極みを目撃してしまいました。以来私は内発的な自己規律以外は決して信頼すまい、と思って生きてまいりました。

### 霊を重んじること

私は内村鑑三（1881－1930、日本の先駆的クリスチャンのひとり）によって福音的キリスト教を知り、その信仰の遺産の中に生きて

いる者ですが、彼の英文論説の一つに「霊と形」（1927）というのがあります。その中で内村は

私は霊を重んじ、形を重んじない。

（道家弘一郎訳）

と断言し、現代人は「美しい形を崇拜」し、宗教においてさえ形は不可欠のものであるとするが、「不思議なことに、聖書のキリスト教は、本質的に霊的であり、ほんの少し形式的であるにすぎない」と論じ、「プロテスタントイズムとは、この形なき霊的信仰ではないのか」と主張しています。

私は自分が「内発的な自己規律以外は決して信じまいと思って生きてきた」と申しましたが、これはこの内村の信仰に学んだものがあります。私にとって＜内発的な自己規律＞と、それによって生きることができるようになることにまさって、＜聖霊の働き＞の確かな保証はないように思われます。なぜなら、それは「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮びもしなかったこと」で、「それを神は御霊によってわたしたちに啓示して下さい」（第一コリント2:9～10）のでありますから。

ところで一昨年私がこの集りで話をいたしました時に、私は皆様のことわざの一つを引きました。それは「始めがよければ、半分なったも同様。（シジャギ パーニダ）」でした。ここでもう一つ私の心に響いた韓国のことわざを引用させていただこうと思います。それは「水は深いほど音をたてぬ。（ムリ カツブルスロウ ソリガ オブタ）」です。これは私どもの文脈に従えば、「霊に生きる深い人間ほど静かであると解してよいであります。そして「静かである」とは「自由である」と理解したいと思えます。パウロが「主は霊である。そして主の霊のあるところには自由がある（第一

コリント3:17）」と言っている通りであります。私の用語によれば、＜内発的な自己規律＞のあるところに自由があるということです。

霊の自由は、私どもの現実の生活の中でいろいろにあらわれるでありましょうが、私は中でも＜生活の簡素＞にあらわれるものだと考えます。アルベルト・シュヴァイツァーは「生活を簡素にすればするほど真実に近づく」と言い、内村は「キリストの二大教訓」（1904）は何かを論じて、「敵に対する無抵抗主義」とともに、「生活問題に関する無頓着主義」を挙げております。

科学技術の進歩は私どもの生活を複雑にし、加えて経済第一のものの考え方が、私どもにそれでなくても多くのものを所有することを余儀なくしています。財産をはじめ地位にしろ名誉にしろ、所有は私どもにそれに対する執着を生ましめます。現代人は所有にしばられ、それへの執着に身も心もからめとられていると言ってよいであります。しかし私どもは本来この世にあっては「旅人であり、寄留者」（ヘブル11:13）であります。旅人は成可く身軽がよいのです。寄留者は成可くものを持たないのいいのです。「霊を重んじ、形を重んじない」方が自由なのです。

このことは特に信仰のことにおいてそうではないでしょうか。昨晚も安先生に教えられたように〔安炳茂（アンビョンム）、主題講演『聖霊とは何か』〕、初代教会において聖餐が次第に形骸化していった時、ヨハネ福音書はそれに対する批判として、あえて主の晩餐の物語を記さず、それに洗足の物語を入れて愛を強調し、6章のパンの奇跡の物語をふえんして聖餐とは「イエスの肉を食べ、イエスの血を飲むこと」とであると主張したのです。ヨハネ福音書が「霊の福音書」と称されるゆえんであります。

私は、私が内村に習った＜無教会主義＞も全く同様のことと理解しております。それは教会は無いとか、教会が有ってはいけないとかいう主義ではなく、ただ信仰における霊の重要性を主張する主義であります。〔形（けい）が神（しん－霊）を圧する時に、神は生きんがために形にそむき、これと離れ、これを捨てざるを得ない。無教会主義はかかる場合に起こる主義である〕（「無教会主義について」1927）というのです。私どもが「形よりも霊を重んずるのであれば、これは「貴むべき、なくてならぬ主義である」と信じます。この集会もそうではありませんか。組織とか制度とかという形がないから自由である。それだからこそ、私どものような者までこうして自由に加えていただき、自由に交わっていただけるのではないのでしょうか。

簡素な生活のことに戻りますが、パウロはピリピ人への手紙の中で「何事も思い煩ってはならない。ただ事ごとに感謝をもって祈と願いとをささげ、あなたがたの求めるところを神に申しあげるがよい。そうすれば人知ではとうてい測り知ることのできない神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守るであろう」（ピリピ4:6～7）と教えております。簡素な生活をすることによって、思い煩い、すなわちあらゆる欲と執着から自由になるとき、神の平安、神の平和が私どもに臨むというのです。欲の克服こそ平和の基であるとは、私どもが咸錫憲（ハムソクホン）先生からくり返し教えられているところです。

### 霊的に生きること

霊（ブネウマ）を重んじるとき、人は霊的（ブネウマティコス）になります。霊的とい

うと、何か観念的、抽象的であったり、あるいは熱狂的になることのように考えがちであります。決してそのようなことではありません。むしろ霊的であるとは、最も合理的、現実的なことでもあります。内村は先の論文（「霊と形」）の中でこうっております。

「形式主義が物質主義に陥るように、霊性が非現実性に陥る危険性はあるかもしれないが、その本質において霊性は、あらゆる存在のなかで最も確実なものであり、健全な思考と有効な行為の基礎として十分に頼ることができるものである。・・・」

このことは次のイエスあるいはパウロのことばをみても、十分に首肯できることであるように思います。

「なんでも隠されているもので現われないものはなく、秘密にされているもので明るみに出ないものはない。（マルコ4:22）御霊の実（前節の「肉の働き」に対して）は愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であって、これらを否定する律法はない。（ガラテヤ5:22～23）」またイエスがサマリアの女に示された礼拝の精神も同様のことを示していると思われま。す。「神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである。（ヨハネ4:24）」

このことばは、私どもの礼拝は霊的であるとともに現実的であるべきことを教えています。現実的とは、形式的な儀式や制度によるのではなく、現実の生活のただ中で神を礼拝すべきであるという意味であります。信仰は決して、宗教、という一つの文化領域の中でのことではなく、人生全体の中で生起する出来事なのでありますから礼拝もまた単なる宗教的「礼拝」ではなく、極めて生活的、現実

的な行為である筈です。それこそパウロの言う「霊的な（原語は『合理的な』の意）礼拝（ロマ2:1）」であります。先に私は「霊に生きる人間は静かである」と申しました。静かでありますけれども、彼の生活の現実、誰の目にもまごう方なく明らかに現われます。御霊は必ず実を結ぶのであり、隠されているもので現われないものはなく、秘密にされているもので明るみに出ないものはないからです。

このことは言いかえると、聖霊の働きはその実によってしか知りえないということですから。人が神の霊に生かされているか否かは、その人が自ら「主よ、主よ」と唱えることによってではなく、それにふさわしい実を結ぶことによってのみ知りうるということです。現われてはじめて隠されていたものがわかり、明るみに出てはじめて秘密にされていたものがわかるということです。そこに聖霊の働きの厳粛さがあると言えないでしょうか。

ところでこの消息を、社会学者マックス・ウェーバーの所論を借用すると、エートス論になろうかと思えます。〈エースト〉とは簡単に申しますと、「ある集団のもつ道徳的雰囲気、ないしは倫理的方向性をもつ生活感情」です。たとえば過日の日本の総選挙において、中曽根首相の率いる自由民主党が戦後かつてない大勝を博しました。約7割の投票率で約半数の人が自民党に投票したといえますから、決して日本人全体が中曽根自民党を支持したわけではありませんが、しかしここには日本人のエートスがあまりにも明らかに現われていると言わざるをえません。それは、その指導者の抱く日本人中心の、おごった新国家主義と、軍事大国志向への協賛、支持であります。日本人の国際化とか平和愛好というものが、結局口先きだけのものにすぎ

ないことを示すもので、まことに恥づかし、はなはだ残念に思うのです。

エートス論からもう一つ考えることは、信仰と政治の間には、私どもが考える以上に相関性、共通性があるということです。信仰と政治は、いずれも〈絶対〉にふかく関わるものです。それが真に絶対を探求するとき、すなわち自らを相対化しようとするとき、それは健全であります。それが自らを絶対化しようとするとき、必ず腐敗、墮落いたします。その意味で、日本人にとって、とくに日本人クリスチャンにとって、〈天皇制〉は大きな試金石でありましょう。

マンハイムという社会学者が「世界はあらゆるものが政治的であり、国家はあらゆる所に顔を出している」と言っておりますが、信仰の生き方は実にことば本来の意味で極めて政治的なものであらざるをえません。それは信仰に生きるということが、人間存在のすべてに関わることだからであります。イエスもこう言っておられます。

「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない。それだから、人の子は、安息日にもまた主なのである。

（マルコ2:27~28）日本ではこれから、いよいよ〈国家〉があらゆる所に顔を出すようになっていくでしょう。その時私どもはどのようにその〈国家〉と対決すべきか。この点について私どもは韓国の皆様に、これまで以上に多くの大切なことを教えていただかねばならないであろうと思えます。そしてどこでも顔を出す日本の〈国家〉は、国民を抑圧するばかりでなく、韓国をはじめアジアの友人たちに多くの不快を与えるようになるであろうことを恐れます。（韓国旅行から帰ってからももしないうちに、「日韓併合は両国の合意に基づくもので、韓国にも責任がある」とい

う藤尾文相の発言があった。) 私は皆様に、どうかこの愚かで傲慢な隣国の民のために祈っていただきたいと切にお願いいたします。

最後に、聖霊の働きの大切な一つの側面について付言しておきたいと思います。それは霊は一つ(エペソ4:4)」であるが、「その賜物は種々ある」ということです。「御霊は同じである(第一コリント12:4)」が、その働きは多様であるということです。

私どもはみな違います。ひとりひとり個別に、神の息を吹き入れられて創造されました(創世記 2:7)。また、ひとりひとり個別に、神の風(霊)に吹かれてクリスチャンになったものです(ヨハネ3:8)。当然のことながら、ひとりとして同じ人間はありません。そこに個の尊厳があります。

ささやかな軍隊の体験から、人間の集団の悪を知った私にとって、このキリスト教の人間観は文字通り<喜ばしいおとずれ>、<福音>でありました。さらに内村の(<単独の勢力> 1912)という信仰(団体の勢力によらず、神とともに独り立つてことをなそうという信仰)が、独りで生きようと願う私を大いに励ましてくれたのでした。

しかし私どもは忘れてはなりません。人は個別に神の息を吹き入れられて生まれ、クリスチャンはみな個別に神の霊に生かされてクリスチャンになったのですが、その神の霊は一つであるということ、個別ではあるが同じ御霊が吹くのだということです。私どもはみな同じ一つの御霊に吹かれているものなのであります。従って個別とは「霊の賜物、務、働きが種々ある」ということであって、個別に臨んで下さる「御霊も、主も、神も同じ(第一コリント12:4~6)」なのであります。

こうして私は独り立つとともに、次第に共に立ち、共に生きることを学ぶようになりま

した。私どもはそれぞれ「一つのからだの肢体」なのであって、多くの肢体は「互にいたわり合って、からだに調和を与え、健康なからだをつくっていかねばならないのです。なぜなら、私どもは「キリストのからだであり、ひとりびとりはその肢体であり」、みな個別でひとりびとりちがうけれども、「一つの御霊によって、一つのからだとなるようにバプテスマを受け、そして皆一つの御霊を飲んだ(同12節以降)」ものなのでありますから。聖霊が私どものうちに働いてもたらずものは、決して一様化・画一性(ユニフォーミティ)ではなく、一致(ユニティ)であります。同じ風に吹かれて、おのおのは異なる音(ね)を出しつつ、一つの妙なる音楽を奏するのであります。

そして、この一致を与えられた群(エクレシア、信仰共同体)は、決して多数者でも、有力者でもありません(第一コリント1:26参照)。常にイエスとともに世に憎まれざるをえない(ヨハネ15:18~19)少数者であり、世にあって「最も小さい者(マタイ25:40)」の群なのであります。

昨晩安先生は講義の中で、「その時代時代に異端視されていた聖霊理解が、正統的なそれよりもむしろ聖書の真実に近いことがある」という、大変示唆的なことを言われました。願わくば、現代においてあるいは異端視されるかも知れない私ども少数者の聖霊理解が、少しでも聖書の真実に近いものでありますように。そしてそのような私どもを、聖霊が自ら慰め、助け、力づけて下さいますように(ヨハネ14:16)。

### むすび

私はもともといわゆる宗教的人間ではありません。聖書を読み始めてから30数年にな

りますが、いわゆる「聖霊体験」というようなこともったことはありません。何年何月何日に確かに自分の上に聖霊が降ったというような経験をもっている方を尊敬もし、うらやましくも存じますが、自分にはそのような経験は全くありません。しかし、自ら自覚して自分の人生を歩き始めてから30数年になる自分の人生をふり返ってみる時、私の上にも確かに聖霊の働きがあったと信ぜざるをえません。それはむしろ「春の雨が地を潤すよに」（ホセア6:3）、私の知らないうちに、静かにそっと私のうちにも働いて下さったと言わなければならないでしょう。

愚かな私はいまやと、それをふり返ってみて、自分にとって聖霊を信ずるとは、一つは「形を重んじないで、霊を重んじること」であり、もう一つは「霊的に生きること」であるということ、少し余計なことを付け加えましたが、お話しすることができた次第です。

何よりも、私のような「無きに等しい者」（第一コリント1:28）がこうして、ここに皆様と「一つのからだの肢体の一つ」として立ち、何の形式にとらわれることもなく、「同じ御霊」の風に心地よく吹かれて、（私の立っているここは、とてもいい風が通ります。）しかもまだわずか3年ほどのおつきあいでしかないのに、確かな一つのエートスにつながれていることを実感しながら、聖書についてのささやかな証言をなしたという、破格の恵みの事実—これこそ実に聖霊の働き以外の何ものでもない—と信ぜざるをえません。なぜなら人はだれも「聖霊によらなければ、イエスは主であると言えない」（第一コリント12:3）のですし、「神はわたしたちの内に住まわせた霊を、ねたむほどに愛しておられる」（ヤコブ4:5）のでありますから。

● 1986年8月7日、「韓国・釜山主日集会、夏期講習会」において語ったもの（韓国語への通訳は曹亨均氏）

（所載）「からしだね」45号

（大阪天下茶屋読書会、1987年3月）